



第 154 号

二〇一八年六月八日発行
発行所 奈良県立
橿原考古学研究所
奈良県橿原市畝傍町一番地
編集者 鈴木裕明

橿原考古学研究所

創立八〇周年を迎えて

所長 菅谷文則

橿原考古学研究所は、昭和一三年

の新聞記事では、考古学研究室として報道されている。古い新聞記事

調べ出したのは、所長に就任した平成二一年である。研究所の成り立ち

を丁寧に調べようとした。翌年には八〇周年記念事業を考えるため、若

手職員からの意見募集などを行ったが、一般的な事項のみの提案に終わ

り、斬新なアイデアは出なかった。八〇年という長い年月を感じた。

大和国史館には私自身、小学生から中学生の頃、一年に一度は父親や

学校の先生に引率していただき見学に来ていた。高校生になって、メス

リ山古墳(調査当時は、東出塚古墳、二年目には鉢巻山古墳と言われてい

た)の調査に参加したこともあり、五六年もの長い時間を橿考研とともに

に過ごしたことになる。

しかしながら、国家にしる会社にしろ、所属組織と個人の関係に従前の

のような全人格の一体感もはや望むべくもないし、近年の会社におけ

る雇用者と被雇用者の関係では副業も認められている。ただし、副業を

成功したひとは、メインの会社への帰属感が強くなるとするデータがあ

ることも月刊誌と新聞記事などから知った。公務員には法令の規定によ

り、僧侶・神職などを除き、職務専念義務がある。

昭和一三年から昭和四五年までの橿考研では、所員はすべてボランティアであった。昭和二六年に『青陵一

三号』に記された関係者名簿は、当時の考古学と関係学術分野の人々

を網羅したものであった。戦中・戦

次 目

橿原考古学研究所創立八〇周年を迎えて
昭和二十一年橿原考古学研究所遺跡見学会
故真鍋建男社長(株)空間文化開発機構代表取締役)を偲んで
中国における研修(上)
○案内 橿原考古学研究所創立八〇周年関連事業
人の動き・海外交流
附属博物館 展示案内

菅谷文則
田中英夫
岡中章太
岡見紀部
編集部
附属博物館
8 8 7 5 3
2 1

後の混乱期の調査メンバーは、島田曉氏が大学を卒業されていたが、他のメンバーは旧制中学生であった。たとえば森浩一氏・田中英夫氏・杉本憲司氏・宮川彦氏らは、堺市から通って、大和六号墳や橿山古墳の調査に参加して下さっていた。北野中学の万喜氏もその一人であったが、

その後の消息が知れない。昭和一三年に始まった研究所は、附属博物館に岡幸二郎氏が昭和三八年に、伊達宗泰氏が昭和四五年に専任で着任された。奈良県の文化財保存課に泉森

皎氏が昭和三九年に着任されたが、発掘調査専任ではなかった。専任の調査員は昭和四五年の遺跡調査室の

発足からであった(全員に橿考研との併任辞令が出ていた)。このように

非組織的な構造が、研究所初期の三〇年間の姿であった。

昭和二六年の県立橿原考古学研究所の設置にともない、いわゆる斯界

の研究者を研究員として委嘱した。その分野は、国史学・国文学・動物



写真1 現保存棟の位置にあった研究所(昭和四〇(一九六五)年解体時撮影)



写真2 現研究所棟南端にあった研究所(平成二一九九〇)年撮影)

学・植物学・人類学・建築史学など、多分野にわたっている。考古学研究所ではあるが、関係の深い諸科学と密接な連携を図っていたと言える。現在の文理融合や複数学問分野の連携を、数十年前に実行していた。現在、研究所の非常勤所員として委嘱している各種専門分野の研究者の方々からご指導いただき、また共同研究させていただいていることは、研究所誕生時からの姿であることを再確認しているところである。

たとえば、高松塚古墳の発掘調査



写真3

大和国史館（昭和二五（一九四〇）年）
（平成二二（一九九〇）年）

において調査着手から約七ヶ月の短時間で『壁画古墳高松塚調査中間報告』を刊行できたのは、各分野の研究者のお力によるものであった。その多くが檀考研の非常勤所員であった。同じことは、太安萬侶墓誌の検討会と、その討議を反映した報告書についても言える。

わが国の現在の大学と高等研究機関は、明治時代以降の縦組織のみでの運営を見直し、広く組織横断的に機動性を付加する方向に進んでいる。フェロー・客員研究員・特任教授など、名称はいろいろであるが、固定化した体制から、非固定流動的組織に変化していつている。檀考研八〇年の歴史は、非固定的な組織に支えられてきたのであり、時代を先取りしてきたと言える。しかし研究所は、常勤職員が増加し、さらには初期からの非常勤の先生方がご高齢となられたこともあり、「力」と「高度化」を上手く更新できていないきらいがある。このことを常勤職員の共通認識とすること、その解決策を提起することが、八〇周年後の重要な案件となる。本庁・県教育委員会との密接な連携のもと、研究所の一〇〇年を目指して行きたいと思っている。

昭和二十一年

檀原考古学研究所遺跡見学会

元 共同研究員 田 中 英 夫

今年（昭和二十一年）は研究所の八〇周年の記念の年であることをご連絡いただきました。たまたま古い写真類を整理しておりますと、昭和二十一年の研究所の先生方の写真が出てきました。

写真は、昭和二十一年七月二一日の檀原考古学研究所の見学会の時のもので、道明寺山古墳群（平尾山古墳群第六七支群二号墳）にて撮影しました。この日は、

大阪府の高井田横穴群、道明寺山古墳群、玉手山横穴群、国府遺跡を見学しています。

写真1に写っている方々でわかるのは、末永雅雄先生（前列左から二人目）、森浩一さん（同志社大



写真1

昭和二十一年（一九四六年）七月二一日檀原考古学研究所遺跡見学会

以外の先生方のお名前は当時知りませんでしたので記録しておりませんでした。

小生が森さんに連れられて最初に研究所に行ったのは、昭和二十一年一月二〇日で、当日は檀原文庫で大和六号墳（昭和二〇年一二月調査）の検討会がありました。当日のノートを見ますと、大和六号墳の出土品として、大型鉄板一七六点、小型鉄板五九点、鉄製扁平斧一〇〇点、鉄製丸斧一一二点、ヤリガンナ七点、変形小刀二〇点、小刀一〇六点、鎌六〇点、石製斧一点、石製鎌六六、円筒埴輪、家形埴輪、盾形埴輪について発表され、出土品は未整理のままの速報でした。ただ、どなたかが遺体埋葬の痕跡がないのではないかと質問されたのを覚えています。

七月二一日の見学会の後は同月の二八日の見学会で研究所と石舞台古墳、菖蒲池古墳を訪れ、八月一九、二二日には桜井市倉橋池古墳群（梶山古墳群）の発掘調査に参加し、一月一七日には研究所見学会で芦生谷金山古墳、お亀石古墳などを訪れました。

一五歳の小生が研究所にお世話になり始めた時の思い出です。

故真鍋建男社長

(株)空間文化開発機構代表取締役)を偲んで

元 奈良県文化財保存課係長・
檀考研附属博物館次長

中 辻 章 太

一、はじめに

私に衝撃の計報連絡が届いたのは昨年十一月一〇日の昼頃のことでした。ここ暫くご無沙汰をしておりました。ここ暫くご無沙汰をしておりましたが、突然の思いもよらない知らせに驚愕したように記憶しています。真鍋社長の病状急変によるご逝去は、私にとって耐えがたい程のショックで暫く呆然自失の幾日かを過ごしていたように思い返しています。

ここに、長年のご交誼を頂きました空間文化開発機構真鍋建男社長を偲んで、思い出や故人の功績などを記して感謝と深甚のお悔やみを申し上げつつ、追悼文を捧げたいと思います。

二、出会いと思い出

確か私と真鍋社長が初めて出会ったのは、およそ三十数年前の初冬の頃、檀原市の現場でのことで、今後の整備計画及び発掘調査、実施設計そして整備工事の施工に取り組んでいこうとしていた国指定史跡新沢千

塚古墳群にて現地の状況を検討をする時のことでした。

当時の私は、奈良県文化財保存課に着任して間もない頃で、文化庁からの指導や助言に対しても、充分な理解ができていたもので、誠に頼りないといわざるを得ない状況でした。

この頃の真鍋社長は、すでに文化財整備等の案件をこなして経験が積まれていたので、検討すべき課題やその内容などについて非常に円滑に説明されました。私は今後の取り組むべき方向性をきちんと認識でき、本整備事業にかかる予算確保及び事業着手にかなりの確信を持ってたように記憶しています。

また真鍋社長は、委託者のもとより文化庁等とも協議打合せを直接間接にかつ慎重に積み重ねられ、特異な分野と言われる各種の文化財整備等に関する豊かな見識を備えておられたので、私には真鍋社長のこの仕事に対する強い意欲と熱意がひしひしと伝わり感動したことを覚えてい

ます。

以来今日までに、真鍋社長は県をはじめ国及び市町村の大小各種の遺跡の整備計画・設計・施工などに多数携わり、各種事業の実施に多大なご尽力をされました。

また、一九八〇年代半ば頃からは会社の業務を文化財関係を専門的に扱うように特化され、全国各地の遺跡等の各種計画や整備等に多数携わり実績を積み重ねられ、今日の事業規模にまで育ててこられました。

今、まさに喫緊の課題として後継者の育成を考えての人材育成に取り組んでおられている最中、病状急変



写真1 真鍋建男社長近影（二〇〇九年撮影）

表1 奈良県内における(株)空間文化開発機構の遺跡保存活用整備実績一覧

遺跡名	市町村名	内容	時期
唐古・鍵遺跡	田原本町	基本構想	昭和63年度
県史跡 尾山代遺跡	奈良市	基本計画・実施設計・施工監理	昭和63～平成4年度
史跡 マルコ山古墳	明日香村	基本計画・実施設計・施工監理	昭和63・平成6年度
史跡 新沢千塚古墳群	橿原市	基本計画・実施設計・施工監理・整備報告書作成	昭和63～平成13・15～21年度
特別史跡 キトラ古墳	明日香村	基本構想・基本計画・実施設計・施工監理・測量	昭和63・平成6・12・16・23～27年度
史跡 高取城跡	高取町	基本構想・実施設計・施工監理・保存管理計画	平成元・4～6・10～13・16～22年度
史跡 頭塔	奈良市	基本計画・実施設計・施工監理	平成2～13年度
与楽乾城古墳及び与楽籬子塚古墳	高取町	基本計画	平成4年度
史跡 高取城跡(石垣調査)	高取町	調査	平成4年度
県史跡 三吉石塚古墳	広陵町	基本計画・実施設計・施工監理	平成4～7年度
史跡 大安寺旧境内杉山古墳	奈良市	実施設計・施工監理	平成4～8年度
特別史跡 藤原宮跡	橿原市	基本計画・実施設計	平成4～7・9～13年度
特別史跡 山田寺跡	桜井市	実施設計・施工監理	平成5～9・11～12・21年度
史跡 大安寺旧境内塔院地区・南大門地区	奈良市	基本計画・実施設計・施工監理	平成5・7～27年度
史跡 興福寺旧境内	奈良市	基本計画・実施設計・施工監理	平成5・7～27年度
史跡 宮山古墳	御所市	実施設計・施工監理	平成6年度
史跡 伝飛鳥板蓋宮跡	明日香村	実施設計・監理	平成6年度
史跡 飛鳥水落遺跡・石神遺跡周辺地区	明日香村	基本設計	平成6～9年度
史跡 水泥古墳	御所市	実施設計・施工監理	平成7年度
史跡 藤ノ木古墳	斑鳩町	基本計画	平成7年度
史跡 定林寺跡	明日香村	実施設計・施工監理	平成7・8年度
史跡 平城京朱雀大路跡	奈良市	実施設計・施工監理	平成7～10年度
史跡 大安寺旧境内(瓦窯跡)	奈良市	実施設計・施工監理	平成9年度
菅原東遺跡 壇輪窯跡群(移設整備)	奈良市	実施設計・施工監理	平成9・10年度
史跡 見田・大沢古墳群	宇陀市	基本計画	平成12年度
史跡 宮滝遺跡	吉野町	基本計画	平成12年度
史跡 飛鳥池工房遺跡	明日香村	実施設計・施工監理	平成12年度
三ツ塚古墳群	葛城市	実施設計・施工監理	平成13年度
特別史跡 粟山古墳	広陵町	基本設計・実施設計・施工監理	平成13～27年度
弥宮池1号墳(移築等整備)	葛城市	実施設計・施工監理	平成14・15年度
史跡 市尾墓山古墳	高取町	基本計画・実施設計・施工監理	平成14・16～18年度
特別史跡 キトラ古墳(保護覆屋整備)	明日香村	調査・実施設計・施工監理・整備報告書作成	平成14・18年度
名勝 旧大乘院庭園	奈良市	基本計画・実施設計・施工監理	平成16・19～23・25～27年度
特別史跡 高松塚古墳	明日香村	基本計画・基本設計・実施設計・施工監理	平成18～21・26年度
玉置神社境内	十津川村	測量・調査・実施設計・施工監理・報告書作成	平成18～24・27年度
史跡 宇陀松山城跡	宇陀市	保存管理計画・実施設計	平成19・23～25年度
史跡 赤土山古墳	天理市	施工監理	平成20～21年度
秋津地区(文化財総合整備計画)	御所市	基本計画	平成23年度
史跡 春日大社境内	奈良市	整備計画	平成24～26年度
史跡 東大寺旧境内	奈良市	基本構想・調査計画	平成24～27年度
史跡 中宮寺跡	斑鳩町	基本設計・実施設計・施工監理	平成24～27年度
飛鳥宮跡	明日香村	基本構想	平成25年度
史跡・名勝 飛鳥京跡苑池(護岸石積保存現況調査)	明日香村	調査	平成25年度
史跡 与楽古墳群	高取町	保存管理・整備計画・実施設計・施工監理	平成25～27年度
県史跡 郡山城跡	大和郡山市	実施設計・施工監理	平成26・27年度
長谷寺	桜井市	調査・基本計画	平成26・27年度
大和・柳本古墳群	天理市	基本構想	平成27年度
史跡 岡寺跡	明日香村	調査・実施設計	平成29年度

により急逝されました。病床では事に復帰する強い意欲を持ちながら、ご本人にあつては誠に残念至極のことであつたと推察されます。真鍋社長の強い意志が、その真際まで失われずにおられたことに、改めて仕事に対する厳しくも強い思いに敬意を、そして深い哀悼の意を表さずにはいられません。

私と真鍋社長とおつきあひは今まで三十数年余に及ぶ長きにわたり、仕事を離れてもなお親しくしていただき、尊敬の出来る数少ない友人でもありました。

また、真鍋社長は生前ご自身の体調はさておき、日頃から私の体調を気遣ひ、お互いに少しでも長く元気にやりましようとお励ましていた

だ
く優しさに胸を打たれましたが、これ程早く悲しい急なお別れがこようとは思ひもかけないことでした。

三、文化財保護への多大な功績

奈良県内における真鍋社長の主な遺跡整備の功績は、新沢千塚古墳群、頭塔、伝飛鳥板蓋宮跡、旧大乘院庭園(県事業)をはじめ、唐古・鍵遺跡(田原本町)、宮山古墳及び水泥古

墳(御所市)、藤ノ木古墳(斑鳩町)、見田・大沢古墳群(宇陀市)、市尾墓山古墳及び高取城跡(高取町)、市尾山古墳(広陵町)、赤土山古墳(天理市)、宮滝遺跡(吉野町)、大安寺旧境内及び平城京朱雀大路跡(奈良市)、マルコ山古墳(明日香村)、さらには興福寺旧境内(興福寺)、東大寺旧境内(東大寺)などがあげられ

ます。

また、国（文化庁・奈良国立文化財研究所）の主な事業では、キトラ古墳をはじめ高松塚古墳及び飛鳥池工房遺跡（明日香村）、山田寺跡（桜井市）などがあげられ、この他にも大小多数の県内遺跡が数えられます（表1）。

一方、北は北海道から南は鹿児島県に及ぶ全国各地の各種遺跡整備等の事業に関しても多大な功績と尽力を積み重ねられました。

さらに、真鍋社長は全国各地の遺跡整備等にあたり設置される委員会においても、その運営を委託者とともにに行い、卓越した経験と識見を存分に発揮され、資料の作成、工程及び計画等の管理、委員会等が指導する発掘調査の成果を踏まえた検討内容を整理して適確な資料作成を行い、円滑な事業の推進に尽力し、多大な事業成果をあげてこられました。また、文化財の整備計画や管理計画及び設計は、その内容が一般土木になじまない極めて特異な分野であるため、専門的に扱う業者が非常に少ないなか、真鍋社長はこの分野の先駆者として取り組み、今日まで各種事業を継続し、全国各地の自治体及び文化財関係者が頼りにする存在

として、多大な功績を積み重ねてこられました。

四、おわりに

衝撃の訃報から、私は未だそのショックから立ち直れずに失意の日々を過ごしていますが、ご遺族や社員の皆様におかれましては、齢六十七歳という若さで逝ってしまわれた故人を思うとき、その無念さと悲しみはいかばかりかと拝察されます。ご冥福をお祈りするとともにお悔やみを申し上げます。

真鍋社長の仕事に対する熱い思いは、残された社員全員の心につながりとして伝わり、引き続き全員一丸となって業務の遂行に取り組んでいかれることでしよう。故人にはこれからも心安らかに天上から見守っていただければと強く願わずにいられません。

ここに改めて、故真鍋建男社長に謹んで深い哀悼の意を表するとともに、ご冥福をお祈り致しましておわりといたします。

最後になりましたが、この度、追悼文を執筆する機会を与えて下さいました榎原考古学研究所菅谷文則所長、関係所員の皆様の本紙面をお借りして厚くお礼と感謝を申し上げます。

中国における研修（上）

岡見知紀

一、はじめに

この研修は、奈良県国際課の「奈良県戦略的専門分野交流事業」により、榎考研所員を中国陝西省に派遣して行っているもので、平成二六年から開始され、今回で三回目となる。中国陝西省の受け入れ先は、西北京大学文化遺産学院及び陝西省考古研究院である。研修期間は、平成二八年一月一七日から平成二九年三月一七日の四ヶ月間であった。研修期間中、陝西省を拠点としつつ、寧夏回族自治区及び安徽省でも調査研究を行った。

二、陝西省での調査

一二月五日、榎考研で研修されていた中国社会科学院考古研究所の宋江寧氏の案内で周原遺跡を見学した。当日、同研究所西安研究室に集合し、車で高速道路を利用し二時間半程で現場へ到着した。この見学には、同研究所の銭国祥氏、徐龍国民も同行した。

周原遺跡は、西周（紀元前一一世紀、前八世紀）の都城遺跡で、陝西

省宝鸡市に所在する。今回は、鳳雛六号版築建物跡と北城壁跡の発掘現場を見学した。鳳雛六号版築建物跡は、中間に庭をもつ、いわゆる四合院式の建物である。遺存状態は良くないが、石敷きの雨落が確認できた。この建物跡は、西周早期の中心的な建物と考えられている。城壁跡は、都城の北側を巡るものである。底部の幅は9mで、壁体は非常に堅固であった。

現場見学後、リニューアルした周原博物館を見学した。博物館の外観は、周原遺跡の建物群を模した構造になっており、メインの展示室は地下にあった。展示内容は、周原遺跡の遺物を中心として青銅器・玉類の展示が充実していた。

一月二七日、陝西省考古研究院の孫周勇副院長、田亜岐氏の案内で、雍山血池秦漢祭祀遺跡を見学した（写真1）。見学日は、ちょうど旧暦の大晦日にあたり、中国は春節休みの期間であった。現地へは、陝西省考古研究院の運転手付きの車に乗っ

て、西安市内から西に二時間半程であった。

雍山血池秦漢祭祀遺跡は、陝西省鳳翔県に位置する、秦及び前漢時代の祭祀遺跡である。二〇一六年度の「全国十大考古新発見」にも選ばれ、中国国内でも高い関心がある。遺跡には大きく分けて、祭天台と祭祀土坑群がある。このうち祭天台の遺構は、小高い山の頂部にあり、周囲には溝を巡らす。この遺構は、文献にも登場し、後の天壇につながる遺構と考えられている。この祭天台から谷を挟んだ丘陵には、祭祀土坑群が



写真1

雍山血池秦漢祭祀遺跡
(右から田氏・孫氏・筆者)

分布する。土坑内には馬の犠牲の他に、玉製人形や青銅器が埋納されていた。このような祭祀が、その後の時代に国家的祭祀として発展し、少なからず日本の古代国家へも影響を与えたと感じた。

三月三日・四日に、陝西省榆林市周辺の遺跡を見学した。この見学は、急遽決まったもので、陝西省考古研究院に、航空券等の手配をすべて行っていた。また、現地では榆林市の袁政氏に、ホテルの手配から遺跡への車移動までお手を煩わせた。

滞在二日目に、石砦遺跡を見学した。石砦遺跡は、中国最古の城壁もつ都市で、陝西省の最北端、神木県に所在する。石砦遺跡へは、榆林市内から車で二時間程を要する。現場付近は、荒漠とした大地で、道路も未舗装の険しい道程であった。現場には、陝西省考古研究院の基地があり、数人の職員がそこで寝泊まりをしている。基地には小規模ながら食堂もあり、毎食調理人が料理を提供してくれる。見学当日の昼食をご馳走になったが、味・ボリューム共に抜群であった。遺跡の見学に際しては、現場を担当している陝西省考古研究院の邱楠氏(二〇一八年樞考研

研修)に案内していただいた。

石砦遺跡では、現在までの発掘調査で、城壁や遺跡の中心となる皇城台が確認されている。このうち、外城東門と皇城台を見学した。

外城東門の構造は、板石を積み上げた大規模なもので、壁沿いに若い女性の頭骨がまとまって出土している。これらの頭骨は、祭祀に伴う生贄と考えられている。

皇城台は、小高い丘の頂部につくられ、苑池や広場などの遺構が確認されており、現在も発掘調査がすすめられている。皇城台の外壁は、板石を積み上げ大規模な石垣状になる(写真2)。

石砦遺跡の年代は、龍山文化晩期から二里頭文化に併行する時期と考えられ、すでにこの時代に、これだけ高い技術や文化があったことに驚きを感じた。

三、寧夏回族自治区での調査

二月五日から一七日の三日間、寧夏回族自治区銀川市を訪れた。西安から銀川へは、飛行機で一時間半程である。銀川の空港では、寧夏文物考古研究所の馬強氏(二〇一五〜二〇一六年樞考研修)に出迎えていただいた。二日目以降は、王宇氏

(二〇一七〜二〇一八年樞考研修)に遺跡等を案内していただいた。

滞在二日目の一六日に、西夏王陵を見学した。西夏王陵は、一一世紀から一三世紀まで存続した西夏王朝の王陵である。現在は、九代の王陵が残されている。このうち見学した三号陵は、初代皇帝景宗の墓である(写真3)。現状では円形の盛り土状になっているが、本来は八角形の塔であったと考えられている。その



写真2

石砦遺跡皇城台城壁

ご案内 橿原考古学研究所創立八〇周年関連事業

ため、現在でも盛り土の外面には、大量の瓦が確認できる。墓室は地下にあり、南側から階段状に墓道が延びる。墓域を囲む土塀は版築ではなく、煉瓦状の土塊を積み上げ構築される。唐などの文化の影響を受けつつ、仏教を厚く信仰し、独自の文化をもった西夏に関する遺構や遺物は、中国文化の多様性が感じられ、大変興味深いものであった。

(以下、一五五号に続く)



写真3 西夏王陵三号陵

◆記念講演会

●東京新聞フォーラム

『よみがえる古代の大和』

日時…

平成三〇年九月二十九日(土)

会場…

日本プレスセンター大ホール(東)

京都千代田区)

テーマ…

『天武・持統朝の宮殿遺跡を掘る
— 橿考研八〇年の研究成果 —』

基調講演…

国立歴史民俗博物館

副館長 林部 均 氏

『天武・持統朝の宮殿』(仮題)

パネラー報告…

橿原考古学研究所

主任研究員 鈴木 一 議

『天武・持統が愛でた庭園—飛鳥
京跡苑池—』

橿原考古学研究所附属博物館

指導学芸員 鶴見 泰寿

『飛鳥宮の木簡』

パネルディスカッション…

基調講演講師とパネラー

●公開講演会

日時…

平成三〇年十一月二三日(金)

会場…よみうり大手町ホール
(東京都千代田区)

日時…

平成三〇年十一月二五日(日)

会場…

奈良県社会福祉総合センター

テーマ…

『古代の輝き
— 橿原考古学研究所・八〇年の
歩み —』

内容…

橿原考古学研究所

研究顧問 石野 博信

『ヤマト王権は纏向から始まった』
(仮題)

橿原考古学研究所

特別指導研究員 前園実知雄

◆研究会

内容…日本中国考古学会

二〇一八年度大会・

平成三〇年十一月三・

四日(予定)

◆記念論集の出版

(橿原考古学研究所論集一七)

テーマ…『空間・ひと・装飾』

出版…平成三〇年九月一三日

(創立記念日・予定)

発行・発売…八木書店

人の動き

〔退職〕平成三〇年三月三十一日付

宮原 晋一 調査部長（定年）

↓調査課主任研究員

（再任用）

那須 重徳 総務課係長（定年）

↓家畜保健衛生所主査

（再任用）

勝川 若菜 附属博物館学芸課技師

神所 尚暉 調査課嘱託

↓加西市教育委員会

生涯学習課市史文化財係

〔転出〕平成三〇年三月三十一日付

坂 靖 附属博物館学芸課長

↓文化財保存課課長補佐

持田 大輔 企画課主任研究員

↓文化資源活用課主査

前田 俊雄 調査課主任研究員

↓文化財保存課主査

〔採用〕平成三〇年四月一日付

木村 結香 調査課技師

内藤 元太 調査課技師

（文化財保存課転出）

勝川 若菜 附属博物館学芸課嘱託

〔転入・所内異動〕

平成三〇年四月一日付

岡林 孝作 文化財保存課課長補佐

↓調査部長心得

吉村 和昭 附属博物館学芸課係長

↓附属博物館学芸課長

小山 雅秀 中福祉事務所係長

↓総務課係長

青柳 泰介 調査課係長

↓附属博物館学芸課係長

小池香津江 文化資源活用課調整員

↓調査課総括研究員

本村 充保 調査課指導研究員

↓調査課係長

今西 隆宏 視覚障害者福祉

センター所長

↓総務課主査（再任用）

東影 悠 文化財保存課主査

↓企画課主任研究員

〔昇任〕平成三〇年四月一日付

鈴木 朋美 調査課技師

↓調査課主任技師

河崎 衣美 資料課技師

↓資料課主任技師

齊藤 希 調査課技師

↓調査課主任技師

岩越 陽平 調査課技師

↓調査課主任技師

海外交流

派遣…

中国陕西省（西北大学・陕西省考

古研究院）へ派遣していた米川裕治所員、韓国国立文化財研究所へ派遣していた絹島歩所員は、ともに三月一六日に研修を終え、帰国しました。

受入…

昨年八月から当研究所で研修されていた中国陝西省西北大学文化遺産学院の孫麗娟氏は、一月二七日に帰国されました。

一月から当研究所で研修されていた韓国国立江華文化財研究所の南浩鉉氏は、三月一〇日に帰国されました。

中国陝西省考古研究院の邸楠氏が、一月二四日から三月一五日まで当研究所で研修されました。

昨年六月から当研究所で研修されていた中国寧夏文物考古研究所の王宇氏は、四月一六日に帰国されました。

附属博物館展示案内

速報展

「大和を掘る36
—二〇一七年度
発掘速報展—」

二〇一七年度に発掘調査された奈

良県内の遺跡から約三〇遺跡を選び、出土遺物・調査写真パネルを展示し、最新の発掘調査成果を紹介いたします。

開催期間…平成三〇年七月一四日（土）～九月二日（日）

講演会…七月二日、八月四日、八月一八日、九月一日の各土曜日（午後一時開始）に遺跡発掘調査報告会「土曜講座」を開催します。

秋季特別展
「古代の輝き
—日本考古学と
檀考研八〇年の軌跡Ⅱ—」

檀原考古学研究所と関係者による昭和初期から現在までの膨大な調査研究の新たなページを切り開いた資料を選んで、檀考研八〇周年記念特別展を開催します。秋季特別展では、古墳時代後期、飛鳥・奈良時代を中心とした資料を展示します。

開催期間…平成三〇年一〇月六日（土）～一一月二五日（日）